

## 仏教権威王国タイ、南国の香り

内田 弘

私のタイ訪問は初めてである。今回の旅程はタイを概観するうえでも、誠に適切な順序であった。農村の地方(チェンマイ)から都市の中央(バンコク)へとたどる今回の旅程で、タイという国の構造がみえてきたと思う。

タイは王国である。英語表記の国名は Kingdom of Thailand である。タイ視察のためにチャーターしたバスから見える農村の道路には、至るところ、とっていいほど、国王が通ったことを記念する黄色い旗が数メートルおきに立ててある。行けども、行けども、道路わきには黄色い旗が続く。これは日本でいう「御幸通り」だな、と思った。「御幸通り」はタイ全国に広がっているだろう。しかも「御幸通り」は結局、バンコクの「エメラルド仏寺院＝王宮」に向かっているのではなかろうか。

「御幸通り」だけでない。農家にも学校にも工場にも事務所にも、金色の美しい「仏像」が祭られている。ここタイ王国は仏教国なのだ。人びとは、出会うとき、別れるとき、合掌し頭を下げる。その敬虔な信徒の姿をみて、なにか大切なものを私(たち)は捨てていないか、失っていないか、と思う。

3月19日の「自由行動」の時に訪れた「エメラルド仏寺院」は眩いばかりであった。まさに宝石の塊である。その脇には「(釈迦を祭る)仏舎利塔・経典塔・王家の墓」の三塔が並んで立っている。その三つは仏教と王家の硬い絆を象徴する。仏法に王法(世俗法)が従うとの表現である。この寺院の境内の中に、仏の第一の信徒・守り手である国王が住んでいる王宮がある。王宮を白い制服を身にまとった近衛軍が守る。その外からダーク・グリーン(黒緑)の制服を着たタイ国軍がガードする。その寺院＝王宮の出入口の近くにタイ陸軍のテントがあり、逞しい軍人が警備にあたっていた。

そのとき、ふと無量寿経の第十八願を思い出した。第十八願で、仏は万民が成仏するまでは自分は成仏したとは思まいぞとの願をかけた、という。ただし、仏・仏教者・親を侮蔑するものは例外である、救済しない、という。その例外は第十八願の「万民の救済」とは矛盾しないかとの論争がある。矛盾するけど、やむをえない。その断念が、仏を守る四天王と、四天王に踏みつけられる餓鬼＝例外者に表現されている。例えば、奈良の東大寺の三月堂をみよ。第一仏徒である国王を守る近衛兵と国軍兵の姿をみて、第十八願問題を思い出したのである。

仏＝国王＝近衛軍・国軍の外側に官僚とビジネス・エリートが囲む。さらにその外には多様な国民が生活している。彼らは敬虔な仏教徒である。彼らの近隣には仏様が鎮座し、近くの道

は黄色い旗がたなびき、遙かなエメラルド仏寺院＝王宮につながっている。タイの周辺部は中枢に仏教信仰で連結する。こうした一体感がタイ王国の統治構造であろう。タイ王国は国王が第一信徒である仏教権威国であると思う。この統治構造の内部で近代的工業化が進み、法的社会的経済的諸制度が設計され実施されているのだろう。

タイからの帰国前、南国の薫風を漂わせる香水を一瓶もとめた。日本に帰ったあと、いまでも、仕事が終わりに、帰宅し書斎に入り、一日の疲れを癒すために香水を「シュー」とひと吹きする。そのなにか、なつかしい香りに身を浸しながら、《ああ、これがタイなのだ》と思い出す。《また行きたいなあ》と南国を思う。